
レイトショー

バッケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイトショー

【著者名】

バッケル

N9238E

【あらすじ】

ある日、レイトショーを見に来た映画評論家の聰は、映画館で若い女と出会つ。しかしその女を館長は見ていと語つ。気になるあまり次の日に映画館に行つた所、彼女の思いがけない事実を知ることになる……。

(前書き)

えーと、 とつあこす作り置きしてたもんだから変なところがあるかもしねない。
そういう所はじゃんじゃんクレームつけただれー。

二十時を回った真夜中、僕は映画館の中にいた。

僕の名前は松永聰、映画評論家だ。職業柄映画を見ることが多い。そして今日も近場の映画館にやつてきた。もちろん映画の評価をしついたのだ。

最近公開した映画の監督から依頼もあって、時間を割いてやつてきた。

しかし、前後の予定上こんな夜遅くにレイトショーとして見るのはじになつた。

しばりくすむと映画がはじまつた。『腐った苺』と書かれたホラー映画だ。

流石にこの時間だと眠いな、眠気と葛藤しながら映画を見る。すると後ろのほうで音が鳴つた。きっとドアでも誰かが開けたのだ。

そつと思つてしばりく見入つていた。

「こんな時間にめずらしくですね」

不意に声をかけられたのびつくりした。振り向くとそこには若い女性がいた。

それはいつのセリフだ、と言つたがたがあたふたと言葉を変えた。

「あなたこそ、こんな時間にめずらしくですね」
何を言いたいのかは同じだつた。

「ホラー映画なんだから、夜見なくちゃ」

そう笑つていつた、しかしこかぎこちない笑い方だ。

しばらく沈黙が続くと彼女は何かを察したようにしゃべつた。

「あ、すいません。映画を見るのに集中していたんですね」

そう言つて自分の元を離れ、僕の目はスクリーンに向けられた。

映画を見終わつたころには、もう一十一時を過ぎていた。

帰つたらさつき見たことを評価して、出版社に送らなければ。

そんなことを考えていた。そういえばさつきの人がないな……。

そこまでつまらなかつたのかな？

館内から出ると馴染みの館長が喋りかけてきた。

「聰さんさつさと帰つちゃつてくれ、今日はあんたで最後だ、さつさと閉めたいからな」

「館長、若い女的人はいつの帰つたんだい？」

そう言つと館長は目を丸くした。

「若い女？ 今日のレイトショ―に來ていたのは聰さん、あんただけだつたよ

え？ と心の中でつぶやいていた。

僕は自宅への帰り道で考え込んでいた。

あの若い女はなんだつたのか、どうして館長はその人を見ていないのであるのか。

もしかして幻でも見ていたのか？ このスケジュールなら無理もない。

疲れがたまつて見えた幻覚、僕はその結果に落ち着けることにした。しかしその後の仕事には精が出なかつた。

次の日の夜に僕は、もう一度あの映画館にレイトショ―を見に行くことにした。

あの若い女がいるとは限らないが、どうにも腹の虫がおさまらなかつたのだ。

ちょうどこの日は、映画を見る予定があつたのでよかつた。受付で金を払つて中に入る、今日見る映画は偶然にもまたホラー映画だ。

館内に入ると薄暗い証明に照らされた中、あの若い女がいた。そして昨日と同じ席に座り、彼女のほうを気にしながらも映画を見ていた。

見終わったときには彼女はまだそこにいた。タイミングを計つて彼女に声をかける。

「また、会いましたね」

彼女はややビックリしたように答えた。

「本当にですね。映画、好きなんですか？」

「職業柄見ることが多いんです」

「映画評論家、とかですか？」

僕はうなずく、彼女が誰か知りたかった、そしてこう言った。

「よかつたら食事でもしませんか、おいしいラーメン屋知ってるんです」

「え……」

「よかつたらですよ、よかつたら。」

「『めんなさい』……。私、ここから出られないから……」

頭の中で自分の今聞いたことを整理した。

ここから出られない？ どういうことなんだろうか。

もしかしてバイトとかなにかなのだろうか、だから館長が入るところを見ていなかつた。

しかし、仕事中にサボつて映画を見る人がいるだろうか。少なくとも彼女は、そんなことをする人には見えなかつた。あくまで推測なのだが。

『私、ここから出られないから……』

その言葉には深い意味がある気がした。

「出られないって、どういってですか？」

彼女に聞いた。そして彼女は答えた。

「言葉通りですよ」

言葉通りと言わなくても、と聞こうとしたとき彼女がしゃべり始めた。

「私、この映画館で死んだんです。ずっと前に」

そのことを聞いて僕は、目の前で喋つて「この女性が、靈の類だ

とは思えなかつた。

「レイトイショーを見ていたら心臓麻痺で、昔から心臓が悪くて」

「それから私はこの映画館から出られなくなつて、いつもこの時間に現れるようになつた」

そんな話を聞いて混乱している僕を見て彼女は言つた。

「私のことを忘れないなら、この映画館にレイトイショーを見に来なければ忘れられるよ」

そんな事を聞きたいんぢやない、この娘はそれで寂しくないのか。

毎日レイトイショーの時間になつては現れ、映画を見ている。

時にはレイトイショーが無い日もあるだろつ、真つ暗な部屋で一人座つてゐる。

もしかして寂しくなつて僕に声をかけたのか、そう思つた。

そうか、親しくなりすぎると、このことを聞いたときこ……

「もう閉まりますよ、早く帰つたほうが

館長が声をかけているのが聞こえた。

「ああ、そうみたいだな」

「じゃあ……さよなら……」

重い扉を開けて家へと向かつた。

次の日、僕はまたレイトイショーを見に來た。そして、そこにいる彼女に声をかけた。

「いやあ、また会いましたね」

彼女は心底ビッククリしたようだ。そして答えた。

「めずらしいです、あの事を言つと次の日には、みんな来ませんでしたから」

僕がここに來たことを言つてゐるんだろう。僕はこう言つた。

「なあに仕事が入つていていたんですよ」

「 そうですか……あ、始まりますよ」

そう言つてブザーが鳴つた。そして彼女の隣に腰をかける。彼女は驚いたが、何かを察したのか顔を赤らめてスクリーンを見た。その日に見た映画は恋愛映画だった。

見終わつた時、隣に彼女はいなかつた。

成仏してくれたのかな、ずっと淋しかつたんだね……。

彼女のためになつたと思うと、僕はうれしかつた。そして少し淋しかつた。

(後書き)

どうぞ、レイクシリー
僕は一度も行ったことがありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9238e/>

レイトショー

2010年10月21日20時36分発行